

煙か土か食い物

舞城王太郎著 講談社 2004（講談社文庫）

サンクチュアリ

フォークナー著 大橋健三郎訳

富山房 1992（フォークナー全集 7）



法学部准教授 上原 正博

今から十数年前、アニメ化された『ONE-PIECE』が初めてテレビ放映されたのを偶然に観たときのショックは忘れられない。家族向けの番組『サザエさん』とか『ちびまるこちゃん』とか一が放映されるゴールデンタイムに、ルフィーとかナミさんら登場人物たちの幼少時代の回想で、幼い子どもたちに対してこれでもかこれでもかと容赦なくふるわれる暴力が描かれていたことに愕然とし、同時に、それまでとは違うアニメが登場したのかもど錯覚した、ウブな自分がいたのだった。無知をさらすようで恥ずかしいし、弁解がましい気がしないでもないけれど、さすがに小学生や中学生が観たり読んだりするものには、あまり暴力や性は描かれないでしょ。

そんな肌合い（「えっ、いいの？こんなの？」といった感覚）をもった物語として、舞城王太郎の『煙か土か食い物』が頭に浮かんでくる。ミステリーもので、海外勤務だった外科医が帰国した際に、自分の故郷で起きた残忍な連続殺人事件を解決する話だったと思うが、やはり記憶に残るのは、物語にあふれる暴力と凄惨さ、そしてそれを支える語り口だった。これまでライトノベルで育ってきた 20 世紀末少女少女やゼロ年代少年少女にはきっとショックな内容

ではなかろうかと懸念するので、『バッテリー』とか『桐島、部活やめるってよ』系の人たちには、卒倒する覚悟で読んでもらわなくてはならない。

そして、このミステリーで免疫ができれば手にとって読むべきは、ウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』だろう。いや、フォークナーの作品ならどれを手にとってもらってもかまわないのだが、とりあえず一冊となれば、読みやすい当作品だろうと思う。とはいえ、暴力あり、凄惨さあり、ともかくにも未成年お断りものが連続するのだから、卒倒するどころか、心臓マヒを起こしてしまうかもしれない。だが、それもまた人間のなせるわざを描いたものであるし、そのような「お断りもの」によってでないとわかってもらえない人間の暗黒面もあることを感じとることができるのではないだろうか。

そこからライトノベルに戻るのもいい。そのいくつかに描かれるイジメの陰湿さに、肉体的成長と精神的成長の不均衡なバランスに気まずさや居心地の悪さを感じているものたちへのまなざしも見えてくることだろう。